

眞生

第三卷 第四號

◆唯我獨尊の誇りの中に其の日を送る小兒を見よ、如何に彼等が父母の膝下に雄々しくも亦勇ましく動けることよ。彼等は眞生の光に生く。

◆而て我等が如來大悲のもとに永生の光に生くるも亦かくの如しである。

◆吾人は小兒が常に親によりて生き親によりて動くが如く我等も亦如來によりて生き如來によりて動くを見る。

◆身心共にミオヤに任せたる吾人の生活には一切が慰安であり望みであり、樂みである。一切の喜びも悲みも、望みも力も樂みもすべてはミオヤを中心とした吾人の心の働きである。

◆されば若し吾等にして一度も此の光を失はんかそこには恰も小兒が父母を離れては片時も生きることができないやうに。

◆吾等も亦如來を離れては刻寸も眞に此の世に生きることができないのである。如來を離れては一刻と雖も眞の望みと喜びに眞に生きることができないのが人生である。

◆如來は吾等の生命であり、力であり、光である。されば如來を離れては我等の生命も力もないのである。従て吾人は己に如來の裡にあり、如來慈光の生命の中にあるのである。(念)

稱名念佛に就て(三)

(人格主義的淨土教の六)

土屋觀道

次に第二の難門は「六度萬行廢惡進善は諸佛の通戒である、然に如何なる罪惡生死の凡夫といへども此の念佛によつて其の罪が除けるといふことは佛教の通戒を破る」と云ふにあるのである。乍然此の問題も念佛信仰の上から見れば殆んど問題とするに足らない問題である。然にもかゝらず古來幾多の人々が往々にして此の問題を問題とするといふことは六度萬行を以つて佛教の正系正態かの如く考へ而も念佛を以て六度萬行と相入れないものと考へた所から起たものである。

乍然靜に此の兩者の關係を考察すれば念佛は前にも申した如く罪惡生死の凡夫が如來の大悲に救はるゝ唯一の方法であつて、六度といひ萬行といふは此の念佛によつて如來に靈化せられた人々が初めて行ひ得べき所の行爲であつて、其の實、念佛を離れては六度も萬行も眞の意味を爲さないものである。然に古來念佛を離れて六度萬行を以て解脱修行の方法かの如く考ふる人々の出たと云ふことは未だ宗教と道德、若は宗教と哲學との如何なる關係のものなるかを知らない所から起つた一種の誤解に過ぎないのである。従て念佛を卑下して六度萬行を尊重するが如きは未だ宗教の精髓を知らない淺はかな人々の云ふ所のものである。

而も如何なる罪人も惡人も只念佛して往生ができるといふことは六度萬行がいらぬといふものでもなければ又道德的行爲がつまらないものであると云ふのもないのであつて、たゞ念佛によつて罪惡生死の罪が消滅するからと云へばとて諸佛菩薩の難行苦行が徒勞に屬するものでもないのである。否寧ろ吾人の信する所によれば我等人類の行動は一切如來を離れては眞の佛道を成就することはできないものであつて、六度といひ萬行といふも要するにそれは如來の心を心とするの行爲に過ぎず、念佛を離れては決して之等の諸行は眞の完成をなさないものである。

而も吾等が稱する念佛によつて滅罪の功德があるといふことは如來大悲の本願力によることは勿論ではあるけれども、そこには又念佛滅罪の道理が道德的立場から見ても充分に知ることが出来るものである。何となれば凡そ吾人の罪惡は何によつて起るかといふにそれは吾人が天地の大道を知らずして其の道を誤まる所から來るものであるからである。従て若し吾人にして此の宇宙の本心たる如來の大道に合一し、天地と一體として眞に生き働くことを得るならば、そこには一切の罪は除かれ、一切の生死の苦難は絶滅して、天地と共なる眞人の世界は開かれて來るのである。而も念佛は即ち如來に南無する唯一の方法であつて、吾人の本心が如來の本心に融合し絶入し歸一するの妙法であれば、そこに一切の罪も汚れも悉く除かれると云ふことは寧ろ當然なる天地の道理であるといはねばならぬ。而て六度といひ萬行といふもそれらは要するに此の念佛の心よりして初めて起つて來る所の宗教的道德行爲に外ならぬものであれば六度と念佛とは又決して別にして考ふ可きものではないのである。

然に世人の多くは往々にして此の道理を知らず單に六庫萬行の如き修行によつてのみ眞に佛位に近づき絶對に歸一し、如來に融合しうるものかの如くに考へてゐると云ふことは所謂道德を以て宗教に換へ

んとする一つの誤りである。尤も宗教が道德と離れざるものであり、高等なる宗教ほど益々高等なる道德と一致するものであるからして、一見宗教即道德、道德即宗教として見られ、宗教と道德との區別は判然しないかのやうに見える所もあるけれども、本來道德と宗教とは各々其の本分を異にする所があつて決して是等は混同視すべきものではないのである。従て宗教は道德の中心であり生命であつて、善惡の規範となるものである。故に宗教は道德を超越し道德は宗教の中に抱括せられ來たるものであつて眞の宗教に生きたるものは又眞の道德にも生きて來るものである。

茲に於て、「他力易行の方法が聖道門の外にあるならば何で之等の諸佛菩薩が難行苦行をせられる道理があらう」「諸佛菩薩の難行苦行のある限り、他力念佛のあるはずはない」などと批難する第三の難問も其の實此の道理を能々案ずれば自ら氷解するところの問題である。

加之吾人の見解を以てすれば己に他力易行の念佛と自力聖道の難行と相對立せしむるといふが如きは一種の誤まりであることさへ見ゆるのであつて、靜に考ふれば聖道淨土の二門を立つるといふことも其の實は聖道を捨て、淨土に歸せしむる如來大悲の方便に過ぎないものである。従て現に此のことは己に法然上人も明かに言はれたることであるが若し吾人の見解をして伏藏なく言はしむれば釋尊一代の教法は道德及哲學の方面と宗教信仰の方面とが説かれてある。而て從來は主として哲學及道德の方面のみが強く説かれ、今日に到つて初めて漸く宗教の眞門が開かれて來といふ可きであつて、所謂聖道門は前者に屬し淨土門は後者に屬するものである。而て吾人の信する所によれば今や一切世界の宗教は正に此の哲學的にして道德的なる眞實念佛の一行に歸すべきものであると信せざるを得ないものである。

従て所謂彼の諸佛菩薩が難行苦行によつて成道するといふが如きも其の信後の生活を強く「つたものに過ぎないのであつて、決して念佛を離れたる六度萬行を意味するものではないのである。故に六度萬行を以て成佛の業因にせんとするが如きは未だ宗教の何ものたるかを解せない人々の爲すことといはねばならぬ。従てかくの如きは道德觀念の薄い人々に對して示された如來大悲の方便であつて、少しく道德觀念の高きもの、否少くとも眞に如來に南無する念佛の信者には自ら求めずして道德的行爲は顯はれて來るのである。従つて第四の難たる「如何なる衆生の罪業も念佛稱名の一行によつて其の罪障が除くものならば誰として善事を行ふものはあるまい」との恐れは單なる危憂に過ぎないものである。凡そ善といひ惡といひ是等は人から爲せといはれて爲し又爲すなど云はれて爲さぬといふやうなそんな淺薄なものではなく、善の爲すべきは爲すなどいはれて爲さずならぬ、惡の爲すべからざるは人から爲せよと云はれて爲し能はない處に於て初めて其の人の人格は定まると云はねばならぬものなれば、苟も念佛して眞人の生活に入らうとする人々に、ごうして諸佛の通戒たる人類の道德を無視することがあり得やう。従て六度萬行を以て往生の業因となすが如きことではないとしても少くとも念佛申さん人々には如來の聖意に反するが如き行爲を以つてよしするものではないのである。

然らば眞の念佛の申せる程の人なればこそ初めて眞の道德をも守りとする人だとも云ふべきではあつて、念佛と道德とが相反するかの如くに感じ又之を以て批難するといふが如きは未だ宗教の何たるかを知らない人々の爲すべきことであると云はねばならぬ。

而て南無の心即ち如來に南無する衆生の一心は南無阿彌陀佛の心であつて、此の心が佛に南無しきつ

た所、そこに佛凡は一體となり、牛佛は不二となる。而て此の一體不二の心から生れ出るところの生活が即ち念佛の生活である。されば念佛の生活は衆生と佛と一致し佛と衆生が離れない生活であつて、これが宗教の生活である。そこには人生の眞意義顯はれ、一切を許し一切を愛する所謂眞人の慈光輝き。萬法は一體となり、敵と味方の差別は除かれ、我他彼此愛憎の見解も絶して、唯光々たる如來大悲の光明のみが輝き渡るの生活である。

乍然かくの如く念佛があらゆる道德の極致と一致するといへばとて吾人は決して宗教と道德とを混同すべきものではない、而て念佛を以て道德の範圍に極限するものがあるならばそれは反つて宗教の本質を誤まるものであるといはねばならぬ。何となれば道德は云ふ善は爲せ悪は爲すなど、乍然善の爲すべきを知りて而かも之を爲し得ず、惡の爲すべからざるを知り乍ら而かも之を止めんとして止め能はざるを如何にすべきか、このところ己に道德は其の力の及ばざることを示すものである。而も此時眞實の宗教は是等の一切を是認し乍ら、無限の理想、向上の一路を指示して而かも永遠無限の如來大悲の中に一切を攝取しつくして來るのである。而てそこに宗教の生命あり、そこに念佛の妙諦は輝いて來るのである。然らば眞の念佛は一切の道德を悉く包含し盡すと共に而かも道德の手の未だ届かない處にまでも其の手を伸ばして一切の衆生を救済し、攝化して眞實如來の報土に生かしむるものといはねばならない。而て眞の念佛は所謂一切の人類をして悉く如來の大道に歸一せしむる宇宙唯一の方法であつて、念佛を措て一切の宗教はないのである。されば吾人が一切の宗教を以て正に將來に於て此の念佛に歸一すべきのもの、又念佛の外に眞實の宗教はないと云ふのもあながち誤りではないのである。

(我が母君の此の世を去りまし、日に、七週忌に於て一九二四年三月廿七日芝學寮にて)

懺悔録

(廿二)

演 阿 彌

聖き戀こそ私の命なる懐かしく懐かしき全き如來様よ。アナタと一つにならんとする切なる心情は如何に私をして悶へしめたでせう。かの一休の「本來の面目坊が立姿一目見るより戀とこそなれ」と歎かれしもげにこそと本當に同情に堪わぬ物があります。本來の面目坊こそは如來様と一つになる戀の勝利者でありますもの。然し私は本來の面目坊よりも何よりも如來様が戀しいのであります。理窟より唯だ眞直に唯だ直慕に如來様と一つになりたいのであります。かうして遠き北の國迄道を求めつゝ彷徨して居るのも唯だ此戀を成就したいからなので御座います。今の私には對社會の關係などを考慮する丈の餘裕はありません。人が笑はふが悪く言はふが自分の解脱の爲めには一切の事に貪着して居られないのであります。何しろこつちは命懸けなのです。理性も概念も有るものですか。こつちは一生懸命なのです。一體普通

信仰を語る人々が眞劍な不情身命の求道的宗教經驗なきに拘らず色々理窟をこねて居るのを見る時何故モット眞劍に成れないのだらうかと本當に悲しみますには居られません。成程云ふ事は獨創的な氣のきいた物でもありません。成程一寸人目を引く而して私達の直感に一應うなづかしめる程のものでもありません。然し反省すべき事は體經なき多數人に氣に入られる思想は大概同類項のかう云つた概念への捨出物に限られて居る事です。概念人は矢張り概念遊戯者の言葉を喜ぶものです。體験なき多數人位厄介な物はありません。多數人に褒められた概念人は途に乗つて益々跳梁致しますからです。深刻らしくて其實深刻でない戯論者の言葉を見聞する度毎に何故モット眞劍になれないのかと痛感に堪えません。是非今一步回光返照して下すつたらと祈らざるを得ません。私達はモットモット眞劍であらねばなりません。モットモット命を捨て、掛らねばなりません。ほんとに腑抜けな私達！。ほんとにあきたらない私達！。死ね死ね！。然様だ。死んだつていい。構ふものか死

んで仕舞へ。死ぬなら死んでもいいでせう。死んで徹底するなら構まやしません。「死ね死ね」とは生温き私を常に奮ひ立たしむる積の聲であります。然し乍ら私は生温き儘に一週間のN市を去つて少し南なる第二のN市に参りました。一行は本當に打融けた家族的な感情で暖國では見られない軒下道をH寺へと辿るのでした。茲のA上人は信仰の深い方で而して其徳化は多くの信仰深い人達を出したとか承つて居ります。此理由でH寺一週間の別時は私に取つて心から期待されて居つた處であります。深信の方々の中に入つて御念佛する事の如何に私を奮勵せしめ精進せしめるであらうかと思ふと、モウ始めから心は躍つて居るのでした。然し乍ら矢張り期待する事はいけない事です。殆ど毎日信者の御宅で御聖人様を御招請するので其御伴をしますから其方に時間をさかれて御念佛は出来ません。私見たいな自己の不徹底にあきたらず絶えず祈らうとする者に取つては是非純粹な別時會が望ましいのであります。土屋上人の勧めでT京のO氏は御親戚二三人を連れて見知られ本當に

其御熱心の有様は見るからに羨ましい程でしたが私達が時々外出するので嘸ぞ張合が無つた事でせうと御同情に堪へませんでした。然し乍ら私達は本當に心から打融けてスツカリ落着いて居ましたから事實長閑さ其物でありました。一日近所の悠久山と云ふの信者のK様の御案内で二臺の自動車に運ばれて遊びに参りました。容姿優々たる松樹に富んだ美しい山然かもN市唯一の公園地と云ふ色々手が入れてありましたが御聖人は佐幕派の快男子河合繼之助さんの墓に御回顧せられついで舊藩公の別荘悠久山莊にK様と社司との御厚意に依つて甘を喫し茗を啜つて御蔭で私達も清樂を恣に致しました。本當に此一週間は悠々とした平温な気分であらうと御聖人様を父として其子供の甘へた甘い雰圍氣の中に喜び戯れて居つたのでした。毎日何回か御聖人様を中心として打ち寛ろいだ茶飲み話が交されました。御聖人様は「今度の時は演さんに隨行して貰ひませう」と二三回繰返して仰しやつてでした。而して「某上人の見佛は餘りに狹義だからもう少し廣い意味に云つて頂くとよいが」

と云ふ事や、又た「某上人の眞如の話も禪宗の宣傳したやうで先年此處で云云の事もありました」云々御話など本當に御腹臍のない御打明けになつた御話も出ましたりして私達はスツカリ親子の氣になつて居ましたのでした。然しさうかうする内に折角の一週間も過ぎて仕舞ました。「噫々またH耶無耶に過ぎた。本當に期待は果敢なく壞れて仕舞つた。然し此次のK町G寺の五日間が残されてある。今更こそ命懸けた。本當に最後としての眞劍な時間だ。噫々本當に期待される此次の五日間よ。御聖人もH町G寺は御念佛の申しよい處に仰しやつた。此の道間は此五日間の前程に過ぎない。どうぞ今更こそ眞劍にやりたいものだ」。本當に腕が鳴ると云ふのは此事かと斗り、はら切れ相に氣が引き立つのでありました。隨行のSS上人は「あなた位信仰が出来て居るならモウ其塵に熱心に求めなくてもよいでせう」と云つて下さいましたが、私にはそんな餘裕は如何しても出来ませんでした。唯だ遺瀬無さがある斗りです。偕て一週間の終りの日が参りました。御聖人様は

信者のH様の御宅に御泊りになつて佛畫をお書きにならねばならぬと云ふので私達丈々大きな目的地たるK町へ先發致しました。日の暮れ頃に汽車が着きました。御寺は樹木の中に包まれた肅森の氣に充ち満ちた大きな殿堂であります。包み切れない嬉しさを以て道場で一心に御念佛しますと雑念などはちつとも起らないで心から祈る事が出来ましたので本當に一時に此處で前の不徹底を取り返す事が出来るであらうと何塵にか喜んだ事です。偕て私達は御寺の皆様を御挨拶を致しました。「おつかれでありませうから」と云ふ御すゝめにかかせて明朝からの眞劍なる三昧會を豫想し乍ら寢床に就かして頂きました。翌朝久しぶりで御弟子の方の高聲念佛に土屋上人の面影を忍びつゝ勇ましくも床を蹴つて起きました。聖人晩年の門下生の一人なるT氏とN工學士の弟さんのN氏とが昨夜私達が寝てから着かれたとかで見て居られました。御聖人様は御晝少し前に御着になりましたが少し御氣分が御悪い様で浮立たぬ御顔を遊ばして居られました。御導師もして下さり尊い

御法も御説き下さり夜分は夜分で御念佛の後簡單乍らも八相成道の御話をして下さいましたが一同が謠ふ御身の讃歌の時は御寒む相に兩袖を合せられて居られます御姿はごうも本當でない様で御座います。座敷に下降せられてから「御寒けがなさいます様ですが」と御尋ね申上げますと「少し悪寒がします然し豫防注射の反應熱だから」と仰しやつてました。それでも直ぐ御寝みになられませんでしたので私達も間もなく其次の間にさう上人と市井の〇青年と三人で（多分T京の〇氏も）寝みました。依例未明起床の半鐘に起ちがつた私達は談笑の間に床を片付け乍ら不圖見るに御聖人様が床の上に半身を上げ少し俯いて御苦し相にして居られますので「御上人様御脚減が御悪う御座いますか。御導師の方は構ひませぬ。もし御無理をなすつて却て長々御寝みになるまちは」と申上げて無理に御休みを願ひました。偕て一同は熱心に御念佛を祈願しました。すのゝ夜夜明けで籠が高くなつた頃目を明けて見ますと御聖人様はチャッと御出まじ下すつて居られました。私達はむじむじ此驚して

否定の眞理(二)

中野善英

否定とは退嬰ではない、否定には消極と積極とがある。

仕うせ死んで行くんだ、もう稼いだつて仕様が あるもんか、少しは楽しみもせなくちやと空嘯いてゐるのは否定ではない。「儲けやう儲けやうと思つて居る内は却て損をする斗りだ、儲けたと思つた事は一度も無い、それが儲けたいと思ふ心を止めて仕事に専心になつた時、案外儲けがあるものだ」とは誰れしも實驗する處である、失ふまいと思つて居る間は心貧しく、捨て切つた時心富んで居る。捨身道の妙味は愛に在る、而し否定の完全なるものではない。命でも出来たら大きな別荘でも造て樂をせやうと思つて居た人が別荘を造ても温泉へ行ても楽しいと思つた事が無い、それが一朝ガタリと破産して九尺二間に這入た時初めて悠心があつたと云ふ、此貧道の富も未だ本當の否定ではない、それは積極に似た消極であり、富道に似た

仕舞ました。「まあ何と云ふ謙敬にして慈悲深い御方でありませう」と心から尊い御姿を拜がますには居られませんでした。御晝頃K醫師の來談を乞ひますと絶對安靜と云ふ事でありませぬ。私も御傍に侍して白毛布の上から靜かに御さすりして居りました。不圖氣付きましたので御足に手を觸れて見ますとまるで氷の様に冷めた。之は大變だと思ひましたので私の油手で一心に御足の裏を靜かに揉む様に御擦り致しました。凡そ三四十分も揉んで居りますと段々血液が循環して温みが出て参りまゐたので靜かに大腿骨から脛骨骨脾の筋肉及び上膊骨腕骨掌骨の筋肉を御さすりして居りますと「余度よくなつたら〇縣の〇町〇所に行きませう。あそこには私の古い信者が居ます。一度行つて置くと土屋さんにも行つて貰ふのは都合がよいから」とか「あなたは熱心ですね。此又一處に何かがへ行つて下さい」とか夫は夫は本當に受け入る様な麗しい御笑顔で私を多量多量見入つては御話下さるのでした。噓を、本當にもなつがむい御聖人様。(續)

貧道である、積極的否定でもなく眞の清貧道でも無い。

佛教に空を言ひ無を主張するのは、それが但空や虚無に紛れなからしめたいからだ、空を云ひ無を言て空無に執し、否定や法貧を喜んで否まに酔ひ貧道に耽けるものであつたら死魔道である。それは退嬰であり消極に墮退してゐるのである、否定以上は否定の無い否定主義なら輕薄な肯定者と何等簡ふ處が無い、清貧を粧ふて常に往時の富に戀々たる連中である。今の所謂否定道はそんな似而非否定道ではない。

法然上人が「我等が心に相應する法門である。我身に堪わたる修行やある」と泣く泣く經藏に入り悲み悲み道を求めて、何れの處にも安住せられなかつたのが「たゞ往牛極樂の爲めには南無阿彌陀佛」の一箇、歸依佛の一に在る事を突き止め、終に「生けらば念佛の功つもり死なば淨土に参りなん鬼にも角にも此の身には思ひ惑づらう事をな

きの絶対自由境に浮かばれた。「智慧の法然」が「十惡の法然」となり、今や智愚善惡をすら捨て、一向彌陀海念佛道に歸入せられた處に全肯定道がある、生死を超脱して平然生死に順乗して行ける寛ろぎがある、そこに何等の固疾もなく大平凡さながらの姿がある、それは皆大否定を打越した者のみの善くし得る處である。

有無を超えて有無に住せず、有なれば有の儘に

主従の見方

四日市 中野新兵衛

序

現代社會に物質己を唯一の資だ力だと思つて、居る人は、主と従、自己と他人、夫と妻、親と子、工場主と従業員、師と弟、僧と俗、富者と貧者……を其まゝ、大小、高低、上下とのみ見て居るのであらふと思ひます……事實それが正しい見方でありませうか？ 少くも我々人類は今一步迎入て

積極があり無なれば無の儘に積極がある、單なる有は有に終り單なる無も無に終る、此二者を打開し否定し去つて眞の肯定、積極道が露はれる。親鸞も此れを「無義ノ義」と云はれた、法然が「善人は善人ながら念佛し、惡人は惡人ながら念佛してたゞ生れつきのまゝにて念佛せよ」と勧められたのは否定道を通つた上での大積極道である。そこに「惡人なを生る況んや善人をや」の念佛救済がある。

見なければなりません。其人が何れの位置にあらうとも如何に人を愛し國家を愛し社會を改善して居るかを見て、初めて大小、高低上下と見るのが前者に比して正しい見方でありませうか……

一、私しが皆様と共に研究したいこと
私しが皆さんと共に眞に研究したいと思ひますこと、又はあなた方から私しに本當に云ひたいと思ふことは何でありませうか？ 私しは以前に、使用者を使用される者とは、何時までも相反するものだ、お金を儲けるには是非ない戦さだ

思つたこともありましたが、皆さんたちの中には、こんなお考へを持つて居られる方がありはせぬかと思ふのであります。

然しながらよく考へて見ますと其考へは、まるきり間違つた考へであつたのであります。

私しは數千萬の財産家の内に三ヶ年ばかり暮したこともありましたが、けれども其あひだに笑つたといふことは、お酒の上での「タワコト」か「のろけ」話しぐらいが、關の山でありました外には他人を「あざけつた」とか「だました」といふやうな卑しいことだけで、おほくの時間はお金のあるために色々なことに手をそめて、人のやすむ間にも相場に變りはありませんか？ 損はせぬかと、それからそれへ心を痛めてロク／＼夜も寝られないから氣分も落ちつかず、自分に心の苦しみがありませんから使用人は勿論家内中のものにあたりちらす家内のものはいつともヒヤ／＼して氣も心も落ちつかず妻子は、いつも泣きの涙で家庭のあたゝかさどては更らになく、豊かな心持ちで暮したことはありませんでした。

私し自身として經驗を得た中にも、事實に於て思つたより以上、お金と云ふものに好かれまして僅かながら蓄めましたが、いせんのやうに小資本でポツ／＼やつて居た時の方が結局は愉快でありました、勇氣もありました、皆さんの中にも私しと同感の方があつたらうと思ふのであります。

……遊藝……などおそらく私し達が目で見たり耳で聞いたりするやうなものでは私達の全身全體が眞に愉快だとか楽しみだすることは出来ないのではありません。

二、限りある人の命は絶へる
こんなことは、すべての人が經驗して居られるのであります。世の中の人は何を望んで居るか？……何を目的に毎日／＼働いて居るか？……と聞

いて見ますと、やはり楽しみとするにたりないところの物たりない淡い楽しみであつて後日に至つて苦しみとなるやうなものばかりを目的にして苦しい思のうちに、汗みぎろに働いて居る人が多いのであります。

こんなことは、わかりきつたことばかりで、皆さんがよく知つて居ることばかりであります、それを知つて居ながらやはり其道ばかりか知らないうもの、やうに（中にはほかに正しい楽しみ道がないものかを探すことを忘れて居るのかも知れません）淡い楽しみを、あてに苦しい道を辿つて居るのであります。

そうしてこんな淡い楽しみでも自分の思ふところまで漕ぎつけて行つたとしても、その楽しみをする時間は、極僅かな時間でありませぬ。

いつまでも世の中に人間で居られるものではないのであります。望んで居た楽しみを得る時間はないのであります。いつまでも人間で居られないのであります。まへにもうしましたやうにたとへその楽しみを得たとしましても、つまらない

之では到底たへ切れませぬのでなにかほかにもつとこれ以上に眞の楽しみを得る方法がありはせぬかと探して居ります中に、此苦しい事實から逃れて、眞で楽しい愉快な男らしい、然も命のなくなることも尙惜まない程の眞の楽しみ道を見出しで居るお方に出會ひ、その道を示されました、そして眞に人間の辿るべき道を教へるもの即ち「宗教」を得たのであります。

人として生甲斐のある、而も未永永遠に、いつまでも死ぬるといふことのない道であります。四、此道を得て私達は如何して行くか

サア皆さん、です、この生甲斐があつて而も死な、く、く、く、よい道があるを聞いて「ア、サヨカ」といつて聞きながらして居られるでしょうか？……私達は限がある、世の中の寶を互に争ふて取り合ふどころでなく、お互に研究して施し合ふべきであつたのであります。言いかへますと争ふて取あふべきでなく、取り得る力を與へあふて行くべきであつたのであります。

與へあふから親密になり、親密になるから、つ

ものであるばかりでなく、私達の命はと見ますと一日一日と世の中から消へてなくなつゝあるものであります。

三、然らば私達は何をねばならぬか

そんな有様では切角人間に生れて來た甲斐がどこにあるでしょうか？生きて居る甲斐があるでしょうか？……こんなことでは、たゞ生きて居ると云うだけであつて生きて居る甲斐はないと思ひます。結局は食つて寝て死を待つて居ると申しましようか、死を待つために食つて居るとしか思へないのであります。楽しみを得るといふことにはならないのであります。

さうするには誰も彼もいやな取りあひがなければならぬことになつて、取つたものは死ぬるまで食つて、艱難辛苦して他人のものをおほく取つたものだけが死ぬるまで安全に食つて死ぬといふだけに止まるのであります。

何といふあさましいことでしょうか、何といふつまらないことでしょうか、お話しするさへ涙であります。

ねに心おもしろく楽しく愉快に而も勇ましく心の底から相助けあふと云ふ止しい誠心になつて働くことができるのであります。

この心があつてこそ一家の圓滿となり、一工場親しみを保ち、更らに進んで國家社會の能率増進、進歩發展の基となるのであります。

この心あつてこそ初めて眞の楽しみを得られるのであります。この他に楽しい嬉ばしい世界はないのであります。さすれば一事業家となり、一工場主となつたものは如何したらいい、でしょうか？即ち私の今日言はんとするところであります。

五、一工場主としての私の考へ

私は或時呉服屋の主人から「この頃の店員（使用人）は使いにくいので困ります……」と云ふ言葉を聞かされたことがあります、この言葉は、この人一人の言はれる言葉でなく大底の主人公の言はれる言葉であります。その時私自身も、そんな考へがまるきりなかつたのでもありません時機来れりとはかりに、折返して其人に尋ねました（元ヨリ研究ノタメ）私しも世の中のおほくの人

ことは此の頃篤切に淋しさを感じ、御相談がありました。小生も又も居ります。如來中心の運動稍と云より大賛成でありますから、御もするご横道にそれ勝ち實相寺様 西下の節には是非御立寄り下さいや山崎様によつて時々正道へ向け

▽大阪 真松院様より

陽春の候皆様には御變りも在らせませんか、定めて慈光裡中に各自

此の程祖山に詣で、祖廟の前に暫

御活動の御事を存じます。

時自己内省して唯々慚徳と感謝の

次に私の方では去る三月十二日

涙が止むることできませんでした

午後〇時五分に一人の女兒が生れ

今度の行基寺様の別時が延期にな

ました、母子共に健在です、名を

りましたとの事、私には非常に樂

良子(ヨシコ)と名付けました彼も

しみにしてゐました丈に大悲觀で

定めし一の理想を以つて此の土に

す近々どこかで御指道に任かり度

生れて來たものでありませう。願

心から念願いたします。

くば私共と同じ道友として今後彼

▽静岡 粟生來治様より

をも御愛護のほどを彼に代つて御

陳者法月様を通じて藤井様の御熱

願ひ申しておきます。

心なる求道心から當地静岡にも光

▽尙序で乍ら道友の諸兄姉より真

明會の集りを毎月催し度幸ひ眞宗

生への原稿をどしどし御投函のほ

系統の信仰團にて差當り有力者二

と御願いたします。

三の同意を得たとの事、小生へも

寄贈並誌代拂込芳名

△寄贈之部 ○金參圓也宇平光太

郎様○金貳圓也羽賀虎三郎様

山田たけ様 青木一行様 法月

光二様 小池上春五郎様 十

▽誌代之部 ○金四圓也百々治之

助様扱にて清水様小西様中島様

百々様分岡尾和助様金剛義光様

伏木保太郎様藤森常次様入澤敏

子様高橋六右衛門様○金貳圓也

長澤利三郎様 ▽眞生誌發送帶

封一包御寄贈林金三郎様より。十二

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓

振替口座東京四七二八八番 眞生社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

編輯兼 土屋 觀 道

發行人 眞生

發行所 眞生社

印刷所 三井 清 次

印刷所 玄々堂印刷所